

皇學館 学園報

第109号
令和8年2月



注目記事
アカデミック 2面
伊勢高等学校と連携協定締結

グローバル 3面
多文化交流で国際人材を育成

イベント&エデュケーション 4面
学生が榎原神宮宝物館で企画展

5面
内定者ボイス

中高トピックス 6面
中高で建国記念の日の講演を開催

7面
高等学校・中学校 卒業生随想

アクティヴスチューデント 8面
大窪理勇さん(神道3)が
読売書法展で「秀逸」受賞ほか

シリーズ
研究室探訪③ 日本近世史ゼミ
谷戸佑紀准教授(文学部国史学科)
卒業生奮闘中
競輪選手 佐藤大地さん
(現代日本社会学部・令和4年3月卒)

発行・編集 学校法人皇學館 企画部
TEL 0596-22-6496・8600

大学 | 大学院 | 文学部 | 教育学部 |
専攻科 | 現代日本社会学部
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704
TEL 0596-22-0201(代) FAX 0596-27-1704

高等学校・中学校
三重県伊勢市桶部町138
[高校] 〒516-8577 TEL 0596-22-0205(代)
[中学] 〒516-8588 TEL 0596-23-1398(代)

令和8年学長年頭講話

午年に寄せて 駆け上がる一年に

令和8年の幕開けにあたり、1月9日、記念講堂において齋藤平学長による年頭講話が行われた。「午年に寄せて」と題した講話では、「馬」を切り口に言葉、信仰、現代社会が直面する課題に至るまで幅広く言及し、新年に向けた展望を語った。

千支の由来

学長は冒頭、千支が成立した背景について語った。私たちが普段「千支」と呼んでいる言葉は元々「十干十二支」に由来し、本来は陰陽五行の

せから成り立っていた。しかし、時代とともに意味が広がり、現在では十二支を指す言葉として親しまれ、年を表す呼び名として定着している。

また、十二支に結び付けられた動物が地域によって異なる点にも触れ、中国・韓国・ベトナムでは「亥」を豚、タイやベトナムでは「卯」を猫とする例を挙げた。

文化や言葉に溶け込む「馬」

続けて、齋藤学長は日本において馬が占めてきた特別な位置について言及。日本では馬が長く人々の生活や価値観の中心にあり、日常に溶け込む存在であるからこそ、その文化的・歴史の意味を改めて見つめ直すことが自己理解を深める手がかりになると述べた。

馬の影響は言語や時間の概念にも及んでいる。「午前」「午後」という言葉は、正午がかつて「午の刻」と呼ばれていたことに由来する。馬に荷を負わせる意の「駄」から派生

*千支の補足説明

千支は古代中国で生まれ、当初は陰陽五行の思想に基づいた。その後、年をより詳しく表すために十二支と組み合わせられ、60年で一巡する十干十二支の体系が成立した。

この暦法は日本にも伝えられ、律令制のもとで公式な年代表記として用いられたが、時代が下るにつれて、年を象徴する呼び名としては十二支が広く親しまれるようになった。現在では千支といえは十二支を指すが一般的である。

鈴が音の波由馬字馬夜の堤井の水を飲へな 妹が直手よ (鈴の音がする宿駅の町の泉井の水を、あなたの手から直接飲みたい)

この歌に見える「はゆま」は、本来であれば「早馬」と表されるはずの語であるが、古代日本語特有の音韻現象によって語形が変化している。「はやうま」をローマ字表記する「hayayuma」となり、母音の「a」と「u」が続く。古代の日に類する話から、名馬の産地として陸奥国が語られている点に触れるとともに、『遠野物語』を例に、馬が貴重であるだけでなく、家族同然の存在として人々の精神世界に深く根付いていたことを説明した。

絵馬や流鏝馬に込められた思い

学長は馬が信仰とも深く結び付いてきたと話題を広げた。かつて財産としての馬を奉納していた風習が時代とともに「絵馬」へと形を変え、現代まで受け継がれていることを紹介。加えて、『今昔物語集』に取められた「わらしべ長者」

に類する話から、名馬の産地として陸奥国が語られている点に触れるとともに、『遠野物語』を例に、馬が貴重であるだけでなく、家族同然の存在として人々の精神世界に深く根付いていたことを説明した。続けて、祈願成就や吉凶を

講話の締めくくりに学長は、馬が力強く「駆け上がる」姿を新たな挑戦へ向かう姿に重ね合わせた。丙午の年に出生数が減少した過去を振り返りつつ、現在の少子化はそれをはるかに上回る深刻な課題であると指摘。そのうえで、学生や教職員に向け、困難を乗り越え、未来へ向かって力強く歩みを進める一年となることへの期待を込め、講話を結んだ。



神奈川小田原市で開催される「小田原梅まつり」で執り行われる流鏝馬神事

オープンキャンパス開催のお知らせ

3/22日 13:00~16:00

春のキャンパス探検DAY

予約不要

13:00~
◆オープニング

13:20~
◆学科説明&模擬講義
各学科教員が学科説明&模擬講義を実施。入学後の学びをイメージしてみましょう。

14:30~
◆教員育成プロジェクト「つばさ」
「倉志会」の活動紹介
教員志望の学生が日頃の活動を紹介します。教員志望の方はぜひご覧ください!

◆キャンパスツアー
学生スタッフがさまざまなスポットへご案内します。

その他、個別相談コーナー、入試ポイント説明会などを予定しています。ぜひ、お越しください。

オープンキャンパス2026の日程は本紙7面をご覧ください。

伊勢の神宮では2月17日に祈年祭が斎行された。祈年祭は音読みで「きねんさい」、訓読みで「としごいのまつり」と読む。「とし」は、萬葉集の巻18・四二四番の伴家持の歌に「我が欲りし雨は降り来ぬ かくしあらば言挙げせずとも 稔は栄えむ(私が待ち望んだ雨は降ってきた。このようなら言い立てなくても稔は豊かだろう)」に見られるように実りを意味する。主に米のことだが、五穀(米・麦・粟・稗・豆)の豊穰と捉えてよいだろう▼「い」は「い」で「い祈む」の省略形である。祈つて願うことを意味する。耕作を始める時期に秋の実りが確実であることを約して予祝儀礼として祈るわけである▼さらに、延喜式に収められている祝詞では、手から水の泡をほたばたと落とし、足の股で田の泥をかき混ぜて整え、といった農作業の描写がある。取り分けて伊勢に鎮座する天照大御神に祈る部分もあり、見渡す限り、大海原や国土の果てから、山のように大御神に奉った初穂の残りを天皇が安心して召し上げられるだろう、という▼日本人はこのように食糧が豊かであることを祈り続けてきたのである。



倉田山
春秋

Academic アカデミック

茶道エッセイで 布藤綾乃さん(神道4)が第1席



表彰状を手に喜びの表情を見せる布藤さん(中央)

令和7年度第46回学校茶道エッセイ学生部において、布藤綾乃さん(神道4)の作品「茶道に触れて感じたこと」が第1席に入賞した。作品は、茶道を通して得た精神的な成長と、日本文化への気付きを丁寧に描いた内容である。

友人に誘われて茶道部に入部した布藤さんは当初、複雑な作法や膨大な知識に戸惑い、同じ失敗を繰り返すことへの自責の念から、茶道に対して強い恐怖心を抱いていたという。しかし、浅沼宗博先生の指導のもと稽古を重ねるうちに、その恐怖心は次第に和らぎ、茶道の奥深さや楽しさを実感するようになった。さらに茶道を通して日本文化の奥深さに触れるとともに、他者が点てた茶を味わい、自身が点てた茶で仲間喜んでほしいと願う思いやりの心を育んだことも、大きな学びであったと振り返る。

卒業後は神職として神社に奉職する予定。「茶道で身につけた礼儀や作法を生かしていきたい」と抱負を語った。

令和7年度 皇學館大学 月例文化講座 実施報告

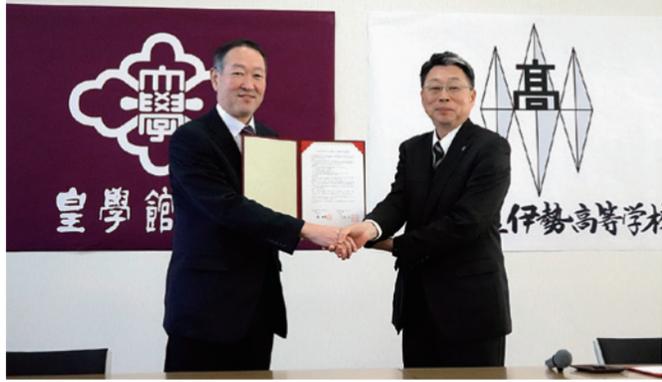
令和7年度の月例文化講座は文学部国文学科が担当し、全8回開催した。受講者数はのべ581名(対面257名、オンデマンド324名)で、アンケートでは約9割が「わかりやすかった」と回答した。並行して令和6年度月例文化講座のオンデマンド版をSNSで期間限定配信し、671回の視聴があった。

令和8年度 皇學館大学 月例文化講座のご案内

令和8年度の月例文化講座は文学部国史学科が担当し、5月から全8回開催予定である。受講は対面形式およびオンデマンド形式で、受講料は無料(事前申込制)。詳細および申込方法は、4月頃に大学ホームページで公開する。

【問合せ先】皇學館大学 企画部地域連携推進室
TEL 0596-22-8635

三重県立伊勢高等学校と皇學館大学との連携に関する協定締結



双方及び、地域全体の教育レベルの向上を図る

1月14日に行われた調印式で伊勢高等学校が平成24年度から指定されているSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)事業において、本学教育学部の中松豊教授・澤友と述べた。これに対し齋藤平学長は「教育上の実質的な連携が実績としてある点で、まさに高大連携の理想形。県内トップクラスの伊勢高等学校との連携によって、互いにプラスの相乗効果が生まれるはずだ」と話した。今後は、本学教員による同校への出張講義をはじめ、各種公開講座への高校生受け入れなど、具体的な連携活動を通じて交流を深めていく予定である。



活発な質疑応答が行われた

令和7年5月2日に山口祭・木本祭が斎行され、令和15年秋の遷御の儀に向けて第63回神宮式年遷宮がいよいよ始まった。この「遷宮元年」ともいべき年に「神宮式年遷宮とは何か」を考えることは、神宮祭祀の研究において重要な意義があるといえる。まず牟禮仁氏(深志神社宮司、元本学神道研究所教授)が「遷宮と聖性―祖型と展開―」と題して基調発題を行い、神宮式年遷宮の祖型の確認と神宮の聖性をいかに保ってきたのかを論じた。続いて佐野真人准教授(本学研究開発推進センター副センター長)が「延暦儀式帳」時代の式年遷宮」との演題で平安時代初期の式年遷宮の様相と変遷について提示し、音羽悟氏(神宮参事)が「持続可能な社会と神宮の自給自足」をテーマに神宮林や御萱山の紹介、持続可能な式年遷宮制について述べた。

パネルディスカッションでは櫻井治男本学名誉教授をコーディネーターに、会場からの質疑を交えながら、式年遷宮がどのように継承・展開・変遷してきたのか検討を加えた。

公立校と初 伊勢高等学校と連携協定

本学と三重県立伊勢高等学校は1月14日、教育交流・連携に関する協定を締結した。本協定は本学が同校のSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)活動支援を通して築いてきた緊密な協力関係を本協定に基づき、双方の教育の充実と活性化を図っていく。

本学にとって高校との連携協定は4校目となるが、県立高校との締結は今回が初めて。背景には、伊勢高等学校が平成24年度から指定されているSSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)事業において、本学教育学部の中松豊教授・澤友と述べた。これに対し齋藤平学長は「教育上の実質的な連携が実績としてある点で、まさに高大連携の理想形。県内トップクラスの伊勢高等学校との連携によって、互いにプラスの相乗効果が生まれるはずだ」と話した。今後は、本学教員による同校への出張講義をはじめ、各種公開講座への高校生受け入れなど、具体的な連携活動を通じて交流を深めていく予定である。

式年遷宮のシンポジウムを開催

神道研究所公開学術シンポジウム 「式年遷宮の聖性と信仰」

令和7年12月20日、「式年遷宮の聖性と信仰」をテーマに神道研究所が公開学術シンポジウムを開催した。神道研究所では過去に「伊勢神宮史研究の現状と課題」(第13回平成18年度)、「神宮祀官の学問」(第18回、平成23年度)、「古代の祭祀と伊勢神宮」(第21回、平成26年度)と神宮研究に関するシンポジウムを実施してきたが、式年遷宮に特化したものは今回が初となる。

御の儀に向けて第63回神宮式年遷宮がいよいよ始まった。この「遷宮元年」ともいべき年に「神宮式年遷宮とは何か」を考えることは、神宮祭祀の研究において重要な意義があるといえる。

まず牟禮仁氏(深志神社宮司、元本学神道研究所教授)が「遷宮と聖性―祖型と展開―」と題して基調発題を行い、神宮式年遷宮の祖型の確認と神宮の聖性をいかに保ってきたのかを論じた。続いて佐野真人准教授(本学研究開発推進センター副センター長)が「延暦儀式帳」時代の式年遷宮」との演題で平安時代初期の式年遷宮の様相と変遷について提示し、音羽悟氏(神宮参事)が「持続可能な社会と神宮の自給自足」をテーマに神宮林や御萱山の紹介、持続可能な式年遷宮制について述べた。

研究室 探訪 Vol.31

日本近世史セミ 【指導】谷戸 佑紀准教授 文学部国史学科(近世史)



古文書を手に 歴史の「裏側」を探る

権力と宗教の 意外な関係

豊臣秀吉や徳川家康といった武将たちは、武力のみで天下を統一したわけではありませぬ。彼らは神社仏閣を保護し、宗教的権威を巧みに用いることで民衆の心をつかみ、社会の安定と支持を得ていました。本ゼミではこうした歴史の「裏側」を読み解くことを大切にしています。



絵画も重要な資料の一つ

古文書解読という 「特殊技能」

歴史の実像に迫るために重視しているのが、当時の人々が残した古文書と直接対話するための確かな力を養います。

立体的な 歴史像を構築

本ゼミの探究は文字史料に留まりません。道具や衣装などの「モノ資料」への注目に加え、史跡を訪ねるフィールドワークも重視しています。



まさに「百聞は一見に如かず」

歴史は決して過去のものではなく、伊勢の方言「いろ(触る)」が江戸時代の古文書にも登場するように、現在と地続きです。歴史を学ぶことは現代社会の根源を理解し、自らの立ち位置を見つめ直す羅針盤となります。断片的な史料をつなぎ合わせ、自ら歴史を再構築する知的冒険を通じて培われる多角的な視点と探究力は、さまざまな業界・分野で活躍する力となります。

Global グローバル

多文化交流で国際人材を育成

本学では真の国際人材を養成するため、多文化交流の推進に力を注いでいる。

現代日本社会学部の藤井恭子教授、瓜田理子准教授が中心となって運営している「多文化研究部会」(例会は月1回程度、昼休みに開催)は、学生と教員が通常の講義とは別に集い、研究・発表・意見交換を行う学びの場である。学生は世界の多様な言語、文化、宗教、社会について学び、発表を通してコミュニケーション力やプレゼンテーション能力の向上を図る。1月20日に浦田萌杏さん(現日2)、堀綾花さん(現日2)、23日に西川輝さん(現日2)が成果発表を行い、マレーシアやインドなどそれぞれ異文化の中で得た気づきや課題を共有した。

また、ポーランド・ワルシャワ大学日本語学科のナブロッカ・モニカさんは篠田学術振興基金を活用して本学に滞在した(1月19日〜2月15日)。モニカさんは日本の食文化を研究しており、特に神社に供えられる神饌について理解を深めるため来学。神社で行われる庖丁式の研究を進め、外国人として初めて師範免許を取得した。滞在中は内宮神楽殿での御神楽奉納や神事を見学。発表では、神道と日本の食文化との深い結び付きについて考察するとともに、実際に包丁式に参加した体験にも触れた。さらには今後は御師等の研究についても取り組んでいきたいと意欲を語った。



左から浦田さん、堀さん、西川さん

本学では今後も国際的な学びと交流を通じ、グローバルに活躍できる人材の育成を図る。

学生の成果発表の概要

【浦田萌杏さん】他国の学生は自分の意見や意思をはっきりと表現し、行動に移す力が高いと感じた。周囲の目を気にして行動をためらいがちな日本との違いを通して、主体的に発信し行動する姿勢の重要性を強く意識するようになった。

【堀綾花さん】日本では、食事や治安の良さと、トイレの清潔さなど、暮らしやすい環境が整っていることを改めて実感した。一方でマレーシアでは失敗を恥と捉えず、挑戦した結果として自然に受け止める雰囲気があり、新しいことへの挑戦や前向きな行動につながっていると感じた。

【西川輝さん】海外での経験は、知識の増加や異文化理解だけでなく、環境の変化によって思考や行動が変わるのが大きな価値だと感じた。異文化の中で行動や選択を重ねることで自分の軸が磨かれ、新たな挑戦に踏み出す主体性と自信を育む。海外経験とは別の世界を見ると同時に、内側の自分を更新する旅。

第65期学友会が発足

第65期学友会が発足し、1月22日に任命式が行われた。齋藤平学長から任命状を授与されたのは、総勢15名。総務委員長に就任した平岩和真さんは、「学生の皆さんがより良い大学生活を送れるように努力していきます。また、多くの学生と一緒に倉陵祭や学友会イベントを企画・運営していきたいと考えておりますので、よろしく願いいたします」と抱負を語った。

総務委員長	平岩和真(国史2)
総務副委員長	川島峻雅(国史2)
会計委員	落合聖里奈(国史2)
庶務委員	石垣里菜(教育2)
	高濱瑛太(現日2)
	小沼かれん(神道1)
	額真桜(神道1)
	服鳥晶(神道1)
	森麗恩(神道1)
	小林聖弥(国史1)
	平川礼桜(国史1)
	河村ひなた(コミ1)
	神崎友希(コミ1)
	古川真優(教育1)
	増田菜々(現日1)

令和7年度 春季フィールドワーク

フィールドワークは演習科目(ゼミ)の一環として、主に3年次生対象に実施し、教室では得られない学びを体感・体得することを目指しています。春季フィールドワークは下記の通り。

学科	目的地・方面	日程	引率教員
国内			
教育	大分・福岡	2/24(水)~2/27(金)	井上兼一 渡邊毅
	東京	2/19(水)~2/22(日)	市田敏之
	沖縄	2/24(水)~2/26(金)	上野祐一 野々垣明子
	北海道	2/23(月)~2/26(木)	片山靖富
	福岡・長崎	2/24(水)~2/27(金)	加藤純一
	沖縄	2/23(月)~2/26(木)	中條敦仁
海外	韓国	2/23(月)~2/26(木)	豊住誠 吉田明弘
	徳島・愛媛・広島	2/23(月)~2/25(水)	萩原浩司
	北海道	2/24(水)~2/27(金)	吉田直樹
	韓国(ソウル)	2/24(水)~2/26(金)	谷口裕信 堀内淳一 大杉成喜 小川真由子 金戸憲子 駒田聡子 高橋摩衣子 渡邊賢二 佐藤武尊
タイ(バンコク)	2/21(土)~2/25(水)		

3年生が英語で伊勢ガイドツアー

皇學館中学校

令和7年12月10日、皇學館中学校3年生による「英語で伊勢ガイドツアー」を実施した。このツアーは英語運用能力の向上と、自国文化ならびに他国文化への理解を深めることを目的としている。今年度はマラウイ、タイ、ミャンマー出身の留学生を迎え、生徒が英語で内宮とおほらい町を案内した。



英語の生きた学びの機会となった

生徒たちは事前に準備したガイド原稿を基に、伊勢神宮の歴史や手水・参拝の作法を説明したほか、昼食時や町歩きの際には「こね寿司や伊勢うどんといった伊勢の名物についても英語で紹介した。留学生からは積極的に質問が寄せられ、生徒に気さ



内宮前で留学生たちと記念撮影

く声を掛ける場面も多く見られるなど、随所で活発なコミュニケーションが交わされた。限られた時間ではあったが、ジェスチャーを交えながら懸命に英語で伝えようとする生徒の姿からは大きな成長と頼もしさを感じられた。本ツアーは生徒にとって国や言語の違いを超えて交流を深める、実り多い機会となったといえる。ツアー終了後には事後学習として、各グループが担当した留学生についてまとめた「留学生紹介シート」を作成し、情報の共有を図った。

これまで実施してきたオンライン英会話や国際交流プログラムの学びを生かし、英語による実践的なコミュニケーションと異文化交流を体験する機会となった今回。今後も自国文化の発信と他国文化への理解を深め、多様な価値観に触れながら、国際的な視野を一層広げていくことが期待される。

卒業生奮闘中!



現代日本社会学部(松阪競輪 三重A級2班)競輪選手(佐藤大地さん)



デビュー戦を初優勝で飾った佐藤選手

子どものころから野球一筋だった私は、皇學館大学でも硬式野球部に所属し、実業団チームへの入団が決まっていた。しかし、3年生の夏に左肩を故障し、内定を辞退。プロスポーツの道を模索する中で、さまざまな競技出身の選手が活躍している印象だった競輪の世界に飛び込む決意をしました。在学中に挑戦した養成所の入学試験は不合格でしたが、2度目で合格。令和6年にプロデビューを果たしました。

練習では先輩たちの脚力に圧倒される場面もありますが、「やりたい自分」になるために、挫折している暇はありません。座り方、立ち方、一挙手一投足すべてが競輪の力に繋がることを、24時間プロとして過ごしています。

現在の生活は、まさに競輪中心です。練習日は朝4時半に起床し、6時から個人トレーニングを開始。9時から13時まで全体練習に取り組み、昼食を挟んで14時から17時まで再び競輪場へ。帰宅後は家族と過ごし、21時には就寝します。

野球部時代から、常に「考えること」を大切にしてきました。客観的な自己分析と自問自答を繰り返す姿勢は今も変わりません。卒業論文のテーマに選んだ「レジリエンス(逆境から立ち直る力)」をまさに今、体現しています。



卓越したダッシュ力が武器

後輩の皆さんには、ぜひ何かに全力で取り組んでほしい。一度「本気を出し切る癖」が付けば、どんな困難も乗り越えられます。私の目標は、プロ競輪選手約2400名の頂点、わずかに9名しか冠することのできない最高峰の称号「S級S班」です。これからのただひたすらに、己を磨き続けます。

Event & Education イベント&エデュケーション

学生が榎原神宮宝物館で企画展

本学では榎原神宮宝物館の全面協力のもと、学生が同館の展示を担う実践的な教育プログラム「博物館実習Ⅱ」(長谷川恰国史学科准教授・高野裕基神道学科准教授担当)を実施している。令和7年11月に開催された企画展「神々に捧げる歌舞」では学生によるギャラリートークも実施され、約1カ月の会期で1062人の来場者を記録。読売新聞にも取り上げられるなど大きな反響を呼んだ。

本実習の発端は、長谷川准教授が『榎原神宮史(続編)』『神武天皇論』の編纂に関わった後に諸資料の活用を図るため、榎原神宮宝物館の展示を担当するようになったことにある。当初、設営には学生有志が参加していたが、令和6年度からは神道学科および神職課程

現場でこそ得られる学び

釜本奏太朗さん(神道4)は実習を振り返り、「大きなプレッシャーはあった



信仰の対象、または信仰に基づき奉納された展示品

履修者を対象とする博物館実習のクラスが開講され、授業の一環として展覧会の企画を担うことになった。学生は3年次後半から約1年をかけ、現役の神職や学芸員の指導のもと、企画立案や史料調査、解説パネル、広報物の作成に取り組む。

が、やり遂げたときの達成感は一とおどった」と語る。特に苦労したのは展示構成で、資料を並べるだけでなく、企画テーマに沿って全体の流れを組み立て、資料を選定する作業に苦心した。

神社の教化活動の一翼を担える神職に

高野准教授からの「展示構成は論文と同じ」との助言の真意を理解するまでに、数カ月をわたる試行錯誤を重ねたという。キャプションの誤字修正や展示配置の変更など臨機応変な対応を求められる場面も多く、「現場では迅速で柔軟な判断力が不可欠。しかし、その

博物館を設置している神社は少なくない。しかし、その多くは専任学芸員不足などの課題を抱える。長谷川准教授と高野准教授は「神社博物館は神道教化の場であると同時に、地域に根差した郷土博物館でもある。神宝を守るだけでなく、その歴史や価値を次世代へ正しく継承し、発信できる『即戦力

となる神職』の育成が重要」と実習の意義を強調する。実際の現場で神職や学芸員と協働しながら展示制作に携わる本実習は、将来の奉職を見据えた貴重な学びの機会となっている。本学は今後も確かな知識と実践力を備えた神職の育成に向け、教育内容のさらなる充実を図っていく。



現場の空気を肌で感じ、神社博物館の現状や課題、可能性について学べる貴重な機会になっている

開催のお知らせ
令和7年度
**伊勢志摩定住
自立圏共生学
教育プログラム**
学修成果発表会

3月10日(火) 12:45~17:30
※予定は前後する場合がございます。
皇學館大学 621教室

第1部 地域志向研究発表会 13:00~
「伊勢志摩定住自立圏共生学」副専攻履修学生が自らの専門領域と圏域の課題を結びつけて作成した卒業論文(研究)を中心に地域課題についての4年間の学びを総括して発表します。

第2部 CLL活動報告会 14:00~
●ポスターセッションの部
ポスターセッションでの意見交換を通じ、学生・参加者間の交流を深めます。参加者投票によるポスター賞の表彰を行います。

●口頭発表の部
選抜された活動が、令和7年度1年間の活動をまとめ、発表します。参加者投票によるオーディエンス賞の表彰を行います。

第3部 表彰式・閉会式 16:15~
●活動報告発表オーディエンス賞、ポスター賞
●伊勢志摩定住自立圏共生学Ⅰ・Ⅱレポート市町賞

発表会終了後、参加者交流会を開催します。どなたでも参加いただけます。活動・年代の枠を超え、交流を深めましょう!(終了予定 17:30頃)
会費: 学生500円、一般1,000円
当日、受付にて頂戴します。

【お問合せ】皇學館大学地域課題学修支援室
TEL 0596-22-8542 E-mail coc@kogakkan-u.ac.jp

新刊のご案内

臨床心理学覚書
高沢佳司 著
A4判
定価1,280円(本体価格1,408円)
公認心理師学部段階カリキュラムの「臨床心理学概論」「心理的アセスメント」、および心理学の卒業論文執筆までこれ1冊でカバー。

令和6年度 月例文化講座 講演叢書
第216輯~第221輯 **伊勢と御遷宮**
板井正斉 橋本雅之 松本 丘
中山 郁 高野裕基 河野 訓著
B6判
定価3,000円(本体価格3,300円)
第63回式年遷宮の始まりの年にあたり、神道学科教員があらためて歴史や魅力をわかりやすく解説した。

お問い合わせ先
皇學館大学出版部 TEL 0596-22-6320
ご注文の際は、出版部ホームページ(右記のコードからアクセスできます)からお申込みください。
http://shuppan.kogakkan-u.ac.jp/

福祉の魅力、学生が発信

「めっちゃええやん! コンテスト」で 現日チームが審査員特別賞



紀宝町生涯学習センター「まなびの郷」で開催された

福祉現場の魅力を再発見する「第2回めっちゃええやん! コンテスト」が令和7年12月7日、紀宝町で開催された。熊野市・御浜町・紀宝町の各社会福祉協議会が共催する同コンテストに、本学から現日日本社会学科3年「大井ゼミ」・中野ゼミチーム(太田凌介さん、中野華さん、西川亮太さん、福井恒晴さん)が出場。新設の「学生部門」で審査員特別賞を受賞した。

本コンテストは、福祉従事者が自らの職場のやりがいやポジティブに発信する催しだ。今年(午後の部)の審査員を務めた。本学チームは紀宝町のデイサービス「宅老所つどい」取材。家庭的な空間で日々の暮らしが丁寧に通じている点や、畑作業などを通じて利用者が「役割」を持ち続けられる仕組み、地域との自然なつながりに着目した発表では利用者が育てた食材を子どもたちと調理する世代間交流の提案も行い、その鋭い観察眼と提言が高く評価された。

度から始まった学生部門(午前の部)では外部の視点で現場を取材し、その価値を言語化することが求められた。なお、本学現代日本社会学科の大井智香子准教授は、一次審査を通過した事業所が発表する

内定者ボイス

早めの準備がカギとなる就職活動。今回は神職、教職、公務員、企業・団体の内定を獲得した先輩たちの声を紹介します。

- ① 大学で得た学び
- ② アピールポイント、成功の秘訣
- ③ 先輩へのアドバイス



神職

【奉職先】樺大神社

西田 祥乃(神道)

① 祭式を学ぶ授業は神職として必須の作法のため、正確に身に付けることを心がけた。神社奉仕を通じて祭典奉仕の経験を積むことができた。

教職

【内定先】高校英語(三重県)



市川 洸太(教育)

① 英語を学ぶ楽しさを教えたいと高校英語教員を志願。専門的な知識や技能を修得するため、大学時代のほとんどを英語学習に充てた。専門書を読んだり模擬授業を繰り返したりと、英語教育に関する見識を深めた。

【奉職先】多賀大社



松下 恵吾(神道)

① 神社や神道全般についての学びは、奉仕の現場で活きる知識であると感じてきた。

② 打ち込んできた篠笛の製作では賞を受賞するなど評価を得る機会に恵まれた。気軽に相談できる先生、友人、先輩・後輩の存在が大きな支えとなった。縦横のつながりが

③ 興味のある神社には実際に参拝し、神職や職員の方の話を直接聞くことが大切。

【内定先】中学校国語(三重県)

【内定先】中学校国語(三重県)

田邊 保直(国文)

① 日々の授業を通して国語の専門性を高めるとともに、対策講座は現職の先生と関われる機会もあるため、全てに参加することができた。

③ 部活やサークルなど縦のつながりを意識して行動することが大切。

【内定先】岐阜県小学校



鈴木 春香(教育)

① ゼミでは現職の先生とのつながりを通して学校現場を知る機会が多くあった。さまざまなボランティアに参加し子どもたちと関わることで経験を積んだ。

② 過去問演習を徹底。面接に加え、傾向に合わせた模擬授業や場面指導の練習は、アドバイスの的確でも役立つ。

③ 子どもと接する機会を増やす、筆記試験の勉強など、できることは早めに行動することが大切。

【内定先】三重県小学校



藤原 瑤(小)

① 研究データに基づいた最新の英語教育を学ぶことで、より専門的な視点で興味・関心を持つことができた。多様な背景を持つ子どもへの理解を深めることもできた。

② 国内外の教育ポランテニアや国際交流事業に参加することで視野が広がり、どんな環境でも粘り強く対応できる力が身に付いた。

③ 教員採用試験は長期戦であり情報戦。「周囲を頼る力」も大切な受験技術。始めるのに早すぎることはない。

【内定先】伊勢市役所(学芸員)



若林 祥吾(国史)

① 博物館実習での卒業展示を通じ、企画から運営まで一から展示を作り上げる難しさとやりがいを感じた。

② 合同説明会に継続して参加し、内定先の職員の方から直接業務の話や面接のことが面接で大きい役割を立った。

③ 試験方法が突然変更されることもあるため、基礎固めとしてSPI対策は欠かせない。

【内定先】鈴鹿市幼稚園教諭保育士



黒田 詩織(教育)

① 「びよびよ」やゼミ活動を通じて、発達段階の知識や遊びのメニューなど、引き出しが増えたことで実習準備もスムーズに進められた。

② 内定者報告会で先輩のリアルな体験談を聞くことで、モチベーションを最後まで維持できた。対策講座が充実している点も助かった。

③ 早期にフィードバックをもらうことで課題が明確になるため、早くから面接練習に取り組む。

【内定先】株式会社イビソク



望月 裕太(国史)

① 考古学研究会での発掘調査や、調査成果を展示として社会に発信した経験が進路選択の大きなきっかけとなった。

② 発掘調査などの活動で、何を考えどんな工夫をしたかなど、自分の強みとして言語化することを意識した。面接練習では話し方や表現の癖を改善できた。

③ SPI対策を徹底すること。

【内定先】松阪市役所



小阪 心音(現)

① 1年次から公務員コンプリートプログラムを受講したことで、試験を意識して勉強に取り組むことができた。

② 伊勢志摩定住自立圏共生学やCLL活動を通じて、地域の方々と関わる貴重な経験を積んだ。面接でも強い関心を持ってもらえた。

③ 志望順位を明確に決めておくこと。提出期限や面接日程の整理など、スケジュール管理には気を付けて。

【内定先】日本年金機構



田中 鳴海(現)

① 大学で学んだ福祉の知識と、ITパスポート・AIパスポートを取得したことが、面接で強みとして活用できた。

② 公務員コンプリートプログラムを受講したおかげでSPIの対策がスムーズにできた。ゼミ担当教員の助言を通じて、納得のいく就職先に出会えた。

③ 計画的な学習の重要性を実感。SPIの対策は重要。面接で自信を持って語れる経験を大学で積んでほしい。

神社実習報告

確認の重み

【実習先】奈良県・大神神社

神道学科2年

井上 陸斗



神職として奉職する父の姿に憧れ、私も神職を志すようになりました。

実習期間中は、朝拝や境内の清掃、御守りやお下りの授与など、年末年始の奉仕を幅広く経験しました。

準備や清掃に追われる中で、強く心に残ったのは「確認」の重みです。万全を期したはずが思いがけない不備が見つかったことで、数の確認といった形式的な確認にとどまらず、「神前に供するにふさわしいか」「それを

受け取る参拝者はどのように感じるか」と、先にある情景まで想像しながら確認する姿勢が不可欠であることを痛感しました。

この経験は、日々の作業を漫然とこなす姿勢から、神職としての自覚をもって奉仕する在り方へと意識を転換させる契機となりました。

実習で培った、目に見えない細部への配慮に基づく想像力と、全体を見渡す自覚的な視野は、神職の道に限らず、社会生活においても指針となるものだと感じています。この貴重な学びを胸に、今後も研鑽を重ねていきたいと考えています。

神職にふさわしい姿勢・所作・態度を磨く

【実習先】愛知県・熱田神宮

神道学科2年

林 知穂

幼い頃より出雲大社に折に触れ参拝し、お正月には大山阿夫利神社へ足を運ぶなど、神社と深く関わる家庭で育ちました。そのような中で自然と神道に興味を持ち、学びたいと考えるようになった。

実習では授与品のお渡しや包装、おみくじの受付を担当しました。

正月の神社には氏子崇敬者だけでなく、観光客や歴史的建造物の見学者など、さまざまな目的を持つ参拝者が訪れます。そのため、時には専門的な質問を

受けることもあり、決められた作業を繰り返すだけでは務まりません。また、白衣白袴を身に着ければ神職として見られてしまうため姿勢や所作、心構えに常に気を配る必要があります。

神職とは、目には見えない神様の存在を人々に示し、神様をより身近に感じられるよう導く架け橋だと考えています。厳かさの中にも親しみを感じていた

ただける雰囲気や心掛けるなど、丁寧な言葉遣いを心掛けるなど、神職にふさわしい姿勢、態度を磨いていきたいです。

建国記念の日の講演を開催

2月10日、本学記念講堂において、皇學館高等学校・中学校の生徒を対象に建国記念の日の講演が行われた。登壇した国史学科の岡野友彦教授は「なぜ日本は『日本』なのか」と題し、日本国家の成り立ちと継続性について講じた。



先人の努力が結実した歴史を学び、国語・日本史・神道を重んじることが、将来も日本であり続けるために不可欠と説く岡野教授

講演では、日本が万世一系の天皇を中心とする国体を維持し、世界的にも稀有な、異民族支配を受けることなく独立を守り抜いてきた国である点を強調。その背景には、先人たちの不断の努力と強い意志があったと述べた。具体例として、元寇における鎌倉武士の奮戦、豊臣秀吉による西欧勢力への警戒等を挙げ、独立とは偶然ではなく、各時代の人々が主体的に勝ち取ってきた成果であると指摘した。

また、建国記念の日を単なる公休日として捉えるのではなく、日本という国家の歩みを再確認する知的起点とする重要性を訴えた。現代の国際情勢が不安定さを増す中、真の国防とは武力のみならず、国語・日本史・神道という固有の文化と伝統を学び、自己と国家の基盤を確立することにあると結論付け、次世代を担う生徒に向けて、学びの意義を力強く呼びかけた。

白熱の英単語王決定戦

1年・学年レクリエーション

12月18日、1学年の学年レクリエーションとして「英単語王決定戦」が初開催された。各クラスの予選を勝ち抜いた代表生徒計18名が、クイズアプリ「Kahoot!」を用いた個人戦で競い合い、あわせてクラス対抗戦も行われた。会場となった体育館は熱気に包まれ、学年一体となった盛り上がりを見せた。



優勝し、賞状を受け取る三島さん

決勝では、意味から該当する英単語を4択で選ぶ形式の問題が出題され、正解に加えて解答スピードも得点に反映された。問題ごとに順位が入れ替わる様子が画面に映し出され、解答者・観戦者双方が緊張感を共有した。クラス対抗戦の上位2クラス、個人戦の上位2名がそれぞれ表彰された。個人戦優勝者である三島香里奈さん(1年9組)が初代英単語王となった。

三島さんは「朝活動が始まったころは、英単語を覚えるのに苦戦した」と振り返る。一つ覚えると、すでに覚えた単語を忘れてしまうことも多く、特に同じ頭文字の単語に悩まされたという。しかし、発音と意味を結び付けて覚える工夫を重ね、少しずつ課題を克服していった。決勝戦では強い緊張を感じながらも優勝という結果を手にし、「とてもうれしい。これからも目標達成のため、努力する姿勢を貫きたい」と感想を語った。

新校友会役員が抱負

12月22日、全校集会がセミナーホールにて行われ、校友会役員の任命式が行われた。新役員となった生徒たちは、よりよい学校づくりに向けた意欲を語った。



前列右端から時計回りに須川さん、松井さん、濱地さん、河村さん、原田さん

総務委員長 松井春陽(2年A組) 写真：前列真ん中

令和7年度に会計をさせてもらった時に培った責任感や、さまざまな経験を生かして、令和8年度は総務委員長として校友会活動により一層熱心に励み、皇學館中学校をよりよい方向に引っ張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

総務副委員長 濱地風奈(2年A組) 写真：前列左

令和7年度に書記を務めさせていただいた時の経験を生かし、これからもよい学校を作っていくように頑張ります。よろしくお願いします。

総務副委員長 須川 功一朗(2年A組) 写真：前列右

この1年間、総務副委員長を務めさせていただきます。生徒の皆さんや校友会役員の皆さんと協力しながら、よりよい学校にしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

会計 河村 竜之介(1年A組) 写真：後列左

この1年間、会計を務めさせていただきます。皆さんが安心して学校生活の実現に向けて頑張っていきたいです。よろしくお願いします。

書記 原田潤哉(1年A組) 写真：後列右

この1年間、書記を務めさせていただきます。皇學館中学校をよりよくしていくために頑張っていきたいと思っています。よろしくお願いします。

第26回 百人一首大会を開催

今年で26回目を数える百人一首大会が2月5日、盛大に開催された。各学年、国語の授業内や日々の休憩時間を積極的に活用しながら百人一首の練習に力を注いできており、その成果が遺憾なく発揮された。



真剣勝負が繰り広げられた百人一首大会

競技は6グループから成る「団体戦」と2グループから成る「個人戦」の2部門に分かれ、各部門において白熱した試合が展開された。団体戦においては各学年、一丸となって札を取り合い、大声援を送る姿が印象的であった。個人戦においては、生徒一人ひとりが練習の成果を出し合い、レベルの高い戦いが繰り広げられた。とりわけ終盤では、さらに甲乙つけ難い試合展開となった。

結果、団体戦と個人戦双方の成績を鑑み、3年A組が総合優勝を勝ち取り、個人戦においては2年A組 松井春陽さんと小田船人さんが各グループにおいて優勝に輝いた。

生徒からは、「練習の成果が発揮されて良かった」「取ろうと思えば取れた札もあったのに、僅差で相手に取られたことが悔しかった」「学年という枠を超え、相互に対戦する中でより絆が深まったように思う」との感想があがった。

「ビジネスパーク伊勢」でキャリア教育

1月30日、1年生を対象に市内にある企業の代表者を招き、「ビジネスパーク伊勢」と題したキャリア教育が行われた。生徒は2グループに分かれ、それぞれが関心のある企業を選択し、実社会で働く人々の声に直接触れた。



当日は、映像制作会社、薬剤師会、機械製造会社の代表者が来校し、各

進路を考える手がかりとなる、身近なロールモデルに触れる機会となった

教室において日頃の業務内容をはじめ、その職業に就いた経緯や仕事のやりがい、社会的役割などについて具体的かつわかりやすく語った。

説明の終盤には質疑応答の時間が設けられ、生徒からは仕事内容の詳細に踏み込む質問や、進路選択に関わる率直な問いが相次いだ。代表者の話に熱心に耳を傾け、積極的に質問する姿からは、楽しみながら職業観を広げ、将来を考える有意義な学びの時間となった様子がうかがえた。

Active Student

高い志とチャレンジ精神でもって学内のみならず、さまざまなフィールドで活躍している皇學館生たち。本コーナーでは彼らの熱い思いとともに、その活動ぶりをご紹介します。

大窪理勇(神道3)さんが「秀逸」受賞 第41回 読売書法展

大窪理勇さん(神道3)が「第41回読売書法展」の漢字部門で、入選のさらに上の荣誉である「秀逸」を受賞。また、「中日書道展」で二科賞、「伊勢市美術展覧会」で岡田文化財団賞を受賞する快挙となった。



小学生から習字を始めた大窪さん。卒業後は神職として奉職する

読売書法展は日本最大級の公募展。今回、4部門での応募総数約2万点のうち、「秀逸」に選ばれたのは1194点だ。

「試行錯誤の積み重ねが、少しずつ形になり始めたのかもしれませんが」と大窪さんは控えめに振り返る。制作においてこだわったのは、字形と行ごとのバランス。納得のいく線が書けず壁にぶつかった際は、多様な書家の筆致を模倣し、自らに取り入れることで突破口を開いてきた。そうしたさまざまな書風の吸収と融合が大窪さんの強み。大窪さんは「多角的に考えることの大切さを書から学んだ。この姿勢を、今後の人生にも生かしていきたい」と語る。



受賞作品は、明、清にわたり活躍した中国の書家・王鐸の臨書

書の魅力について、「美しい字が書けたときの達成感や、書き手の個性がにじみ出るところ」と大窪さん。今後のさらなる成長と活躍に期待したい。

川口陽来(大学院)さんが Mie-英語授業PR大使に

三重県の英語教育の魅力を発信する「Mie-英語授業PR大使」に、川口陽来さん(教育学専攻修士2)が令和7年7月から令和8年2月まで任命された。川口さんは県内の小・中学校を中心に英語授業を視察し、発問の工夫や児童生徒同士のやり取りを促す手立て、ICTの活用などを多角的に分析。その成果を授業づくりに生かせる形に整理し、SNSを通じて県内外へ発信した。



川口さんは「児童が安心して話せる雰囲気が大切」と語る

「活動を通して英語教育に対する見方が大きく変わりました」と川口さん。「表現を覚えて使う授業という印象が強かったのですが、実際には、児童生徒が英語でやり取りすることを大切にされた実践が広がっていました」と言い、「英語を使って人と関わる経験を積ませようとする姿勢を、現場から強く感じました」と実感を込める。

授業づくりの視点も広がった。「活動の面白さだけでなく、児童生徒が安心して間違えられる雰囲気づくりや言い直しを支える声かけ、やり取りが続くしかけが欠かせないことを、現場を通して具体的に理解できました」と話す。「自身がめざす授業像がより明確になり、授業づくりを主体的に学び続けたいとの思いが一層強くなりました」。

修了後は三重県の小学校教員として勤務する予定。「理想の教室の姿は、英語が得意・不得意に関わらず、全員が安心して発話し、相手の話を受けて反応できる場です。教師として対話の継続を支え、児童一人ひとりが『伝わった』『通じた』という実感を積み重ねられる教室を作りたい」と意欲を語った。

伊東亜里紗(高2)さんが 水産庁長官賞受賞 第44回 豊かな海づくり大会 作文コンクール 高等学校の部

皇學館高等学校2年の伊東亜里紗さんが「第44回全国豊かな海づくり大会～美し国みえ大会～」作文コンクール・高等学校の部において「水産庁長官賞」を受賞した。



「海は人類共通の財産であり、平和を守る教室」と伊東さん

受賞作「地政学から見た豊かな海」は海の恵みへの感謝にとどまらず、海洋をめぐる問題を国際関係論に基づく学術的視点から考察した意欲作である。伊東さんは、国際社会における日本の立場や海洋資源の重要性を「地政学」という切り口で分析し、持続可能な海の未来を築くためには国際協調が不可欠であると論じている。執筆にあたっては、「経験の少なさを補うために多角的な調査を重ね、自分なりに考えたこと」を構成の柱に据えたという。

天皇皇后両陛下がご臨席される大会であることも執筆への大きな原動力となった。「どうしても参加したいという強い思いで書きました」と語り、「このような賞を受賞でき、とても嬉しい」と率直な喜びをにじませた。

昨今、レポート作成や探究学習において高校生がAIに触れる機会も増えている。しかし、伊東さんは、「自分の頭で考え、試行錯誤しながら言葉を選ぶ過程そのものに価値がある」と、作文に向き合う姿勢を振り返る。

今後の目標について伊東さんは「世界を知り、さまざまな経験を重ねながら成長していきたい」と話した。

大学附属図書館 活動紹介

学術研究発表の場として活用

大学附属図書館2階展示コーナーは、本学における教育・研究成果を広く発信する場として活用されています。今回は、令和7年度の展示をご紹介します。

第2回展示「六帖の世界」を開催中

【期間】令和8年1月26日(月)～3月12日(休) 【場所】図書館2階 展示コーナー

第2回展示「六帖の世界」は国文学科の木村尚志教授、並びに大学院国文学専攻博士後期課程の池上遥平さん、楊瑩さんの協力を得て企画されました。

中国に由来する「六帖」は、事物や言葉を門類ごとに整理する類書として成立し、その分類意識は平安中期に和歌の題の世界へと応用され、「六帖題」が生み出されました。鎌倉中期には、『新撰和歌六帖』をはじめとする大規模な歌集が編まれるなど、和歌制作の重要な方法として広く用いら

るようになります。その後も六帖の考え方は、連歌・俳諧、さらには江戸時代の和歌や類書へと受け継がれ、日本文学における題詠と創作のあり方に大きな影響を与えてきました。

本展示では、関連する書物や作品を通して、六帖という思考の枠組みが切り開いた詩歌の世界を紹介しています。ぜひこの機会に図書館へお越しください。なお、「図書館出張展示」として、受付担当前に設置したiPadでも展示の様子をご覧ください。



「和歌拾遺六帖」文政3年(1820)刊行。当時存在した契沖自筆本を忠実に模刻したもの

第1回展示 終了 「御師の祓具」

令和7年11月13日から12月22日にかけて、第1回展示として本学神道学会神道儀礼研究部会企画による「御師の祓具」を開催しました。研究代表者は神道学科の新田恵三助教。

神宮の崇敬を支えた御師は、「祓」「神楽」「参詣」など多様な宗教儀礼に関わっていました。中でも「祓」は「伊勢流祓」とも称され、祓が修された「御祓大麻」が配札活動によって各地に頒布され、伊勢信仰を全国に浸透させました。同展では本学所蔵図書を参考に復元した祓具を展示しました。



展示協力：篠田学術振興基金 助成金

令和8年度の展示については大学HPで随時ご案内します。